

藤田勝久編

『東アジアの資料学と情報伝達』

汲古書院 二〇一三・一一刊
A5 三六〇頁 九〇〇〇円

本書は出土資料等から、東アジアの情報処理の歴史を解明しようとするものであり、藤田勝久・松原弘宣編『古代東アジアの情報伝達』、同『東アジア出土資料と情報伝達』に続く愛媛大学「資料学」研究会の活動に基づく三冊目の論文集である。本書で同会の「資料学」は新たな段階に入ったといえる。最も注目されるのは、東アジア各地域の研究を繋ぐ枠組みとして「機能を比較するフィールド」としての東アジアが提唱されたことである。これによって構造的な分析と比較への道が開かれた。

第一部「東アジアの資料学研究」には以下の論考が収録される。

藤田勝久「中国簡牘の文書・記録と情報伝達」は東アジア「資料学」の新たな方向性を提示する。中国簡牘と韓国・日本木簡は時代的懸隔に由来する書写材料状況の違いが比較研究の妨げとなるが、本論考は一連のシステムの中で形態が変化しても同じ機能を持つ情報伝達の原理に注目して歴史内容の差異を解消する方法を提案する。これによって中国簡牘の機能を分析・分類し、日本古代木簡と比較する。続いて、出土簡牘研究の現状を紹介した陳偉「秦簡牘研究の新段階」、工藤元男「楚簡・秦簡研究と日中共同研究」、金慶浩「韓国の木簡研究の現況」が収録される。近年の出土

資料の増加と研究の進展は驚くべきものである。次に、文書の機能と関わる論考二篇が収録される。關尾史郎「破簡・別簡考」は裁断することで証書の機能を持つ「簡」の三国呉の地方行政における使用状況を分析し、「簡」の両片を分有・保管する両当事者はいずれも掾クラスの県吏であり、裁断の際に当事者双方は立ち会わないとする。石上英一「奄美諸島史料と文書の集合態・複合態」は近世奄美諸島の田畑家隠居跡文書の集合態を分析し、正倉院文書の研究から得られた類型と比較する。また鹿兒島藩の統治制度による複合態文書の存在も指摘する。

第二部「出土資料と情報伝達、地域社会」には以下の論考が収録される。金秉駿「張家山漢簡『二年律令』の出土位置と編連」は『二年律令』は墓主が使った正本ではなく、埋葬のために抄写・編連されたものとする。張俊民「漢代郵駅システムにおける駅の接待方式」は懸泉置簡の鼓令冊・適令冊から漢代郵駅機関の運営を復元する。侯旭東「後漢『乙瑛碑』における卒史の増置に見える政務処理について」は『乙瑛碑』から皇帝の裁可を得る情報伝達経路を復元し、皇帝の「臣民の建議の傾聴者」という側面を示す。馬怡「漢晋時代の倉廩図にみえる糧倉と簡牘」は漢晋墓葬の倉廩図に描かれた人物の持つ棒・束状物が倉の出納の券書だと論じ、簡牘の使用を可視的に示す。上野祥史「漢代北方の地域社会と交通」は墓葬と県城の設置を対照させ、漢代北方地域で漢人の生活文化圏と郡県制による帝国領域にズレがあったとする。佐々木正治「漢代における鉄製農具の生産と流通」は鉄錘の出土状況と後漢の碑文から郡を単位とした漢代の鉄製農具の流通形態を示

す。

以上、本書には最先端の資料・方法を用いた研究が多数収録される。本書の提起する機能比較という方法は東アジアに止まらない地域の情報伝達との比較研究の可能性を開くものであり、幅広い分野の研究者に読まれることで関連する研究の発展に寄与することが期待される。

(石原遼平)